浸潤性胆嚢内乳頭状腫瘍の 2 症例

◎野田 夏光[1)]、水島 靖子[1)]、長山 亜由美[1)]、福島 奈央[1)]、執行 智恵美[1)]、柳場 澄子[1)]、川野 祐幸[1)]
久留米大学病院 臨床検査部[1)]

【はじめに】胆嚢内乳頭状腫瘍(ICPN)は、2019 年 WHO 消化器腫瘍分類で再分類された胆嚢上皮性腫瘍の一群であり、胆道癌取扱い規約第 7 版に掲載された。病理組織像は薄い血管間質を軸とする乳頭状増殖を特徴とし、浸潤を伴う症例も少なくない。今回、浸潤を伴った ICPN 2 症例の超音波画像(US)と病理組織像の対比を行ったので報告する。

【症例 1】80 代、女性。原発性胆汁性胆管炎の経過観察 US にて、胆嚢体部に 21×8mm の広基性腫瘤を指摘。腫瘤粘膜面は比較的整で、高エコーが連続していた。内部エコーは不均一、一部に低エコー域がみられ、低流速血流(SMI)にて樹枝状シグナルを認めた。また、肝床側の外側高エコーは保たれていた。病理所見は、低分化型腺癌成分の浸潤を伴う、乳頭状増殖を示す腫瘍性病変であり、ICPN with associated invasive carcinoma の診断であった。

【症例 2】70 代、女性。前院 CT で胆嚢腫瘤を指摘され当院受診。US にて、胆嚢頸部に 23×17mm の広基性腫瘤を指摘。腫瘤粘膜面は不整で、高エコーが連続していた。内部エコーの一部に低エコー域がみられ、SMI にて線状シグナルを認めた。外側高エコーは一部不明瞭であった。病理所見は、明瞭な腺腔形成を示す高分化型管状腺癌成分が浸潤した、乳頭状増殖を示す腫瘍性病変であり、ICPN with associated invasive carcinoma の診断であった。

【考察】US では 2 症例ともに、腫瘤粘膜面は高エコーが連続し、内部に一部低エコー域を認めた。病理組織像において、乳頭状増殖した腫瘤表面を、US では連続した高エコーとして描出し、癌細胞が密に存在した腫瘤内部を、US では低エコーと描出したものと考えた。一方で、浸潤領域の描出は困難であった。また、血流に関して、組織学的に薄い血管間質が豊富であることから、血流評価が診断の一助になる可能性が指摘された。今後は、症例を蓄積し、血流パターンを含め特徴的な US 所見の抽出が望まれる。

【謝辞】ご指導頂いた久留米大学病院臨床検査部　内藤嘉紀先生に深く感謝申し上げます。

連絡先 0942-35-3311 (内線 6102)